湖月抄 玉のうち

八

内閣文庫

花宴

花詩をいて名とす。但巻の初めは南殿の橘の宴せ
ものふとあるて、奥の二条の后の宴乃ち花の宴
たまふとあるは、花をよつて巻の名と花の宴といふるあやと、
作り出て、古集花の宴とは橘を賦事といふ〳〵〳〵作らう（是
ハ禁中の事也、されど私の家に宴なれど花南殿の橘乃宴とも
て名目とせりと知べきなり　義云　巻名南殿橘宴事也則花
宴也　細　唐土は花と云へ牡丹日本は花とゆふは橘也、橘宴花
宴を分べきなり。孟　此巻は紅葉の賀乃次のとして花を也
源氏十七巻、宰相中将三位也　細　晩日　花宴之例、文　花　國史云弘
仁三年二月辛丑幸神泉苑覧花樹命文人賦詩賜綿有差云
花宴監觴也、又云桐壺帝と醍醐と準ずるなつて彼御
宇花宴と仰るるれし事、延喜十七年三月六日常寧殿花宴
詩題春夜翫櫻花延長四年二月十七日清涼殿花宴詩題櫻

繁春日鉢此両度之例よハ見べし〳〵後ごろ探韻作文也延喜年
あり物語 南殿花宴例事 光孝上天皇康保二年三月桜橘樹
於南殿有花宴詠古詩誦新歌云々此時ハ探韻なとハ
〳〵も南殿の橘を御覧の例也又醍醐の御世の後の事な
きとも准擬より引用べきなるや

さ〳〵〳〵紅のこゝろのあらはれん
てんのさゝ〳〵れえん 細 延長四
年二月十七日の宴次第依の
准擬なれ南まろ酣酬の門
延長八市代の末也今この花
宴も相叡の市代の末也事
二月九余日も勢いて延長ま
叶て 河 南殿橘紫震殿
の桜ゆまあり是大略草創
らうの樹と貞観ま枯とい
へとも根らりてゆ蔭か
ゆ坂上滋寺これをり
枝葉茂盛云々 師云 尤近
の橘と云是と今も紫震
殿の西階ちくにあり 拾芥
抄云中山名所也作南殿前庭
櫻樹者本是梅也桓武天
皇遷都之日所被植也而
及兼和年中枯失仍仁
明天皇被改樹也云々
花延喜の帝常寧殿の
花宴も宴席と八清涼
殿ふくひ〳〵〳〵〳〵
結の花の事も南殿乃

南殿八紫震殿
清涼殿
細 音
河 解
親王
細 文
上達
梁塵
中 將源氏
詩
宰相
細 光
原の次ハ

さ〳〵〳〵紅のこゝろのあらはれん
てんのさゝ〳〵れえん
のえんせさを結右衛
よ〳〵〳〵〳〵
文のこゝ
〳〵涙
〳〵でまゝ
〳〵
色鳥のこゝ
〳〵
〳〵〳〵
〳〵〳〵
〳〵

[illegible]院ありて家とは清涼殿よりつゝせあるべしとぞ
右兵衛督　細　右は花園兵衛督の家は朱雀院行幸の例
南殿の桜を[illegible]せられて　細　南殿の桜は花園の家は左大臣
やりく清涼殿よりつゝせられて　明　花園左大臣の例
ていそのうちありつゝきゝめや　細　あるかに左右をとゝのへられ殊に今日は未剋
こゝろそへの女院　細　時長の家は乙女の家は[illegible]
日いとうくしくれて　細　時長の家は乙女の家は[illegible]
ふくみもしぬ花の春は[illegible]
うんめんのうて　細　韻の字を一字つゝ[illegible]
花云　先[illegible]之儒者義作献題次書韻字盛中院置庭中文殿上近衛次将先探御料韻
字二置[illegible]蓋昇自御前陪酌之次公卿堪属文者文人等各進文殿頭探一字見之
姓名及題探字也今案探韻各一字詩也悉韻字替也故懐紙端作云春日同賦春夜
[illegible]花各一字應制詩　探得其字　如此可書也　晩　韻字を一字つゝ探えらく作る其作法先[illegible]
と儒者の文章のうつくしきを中少将のかりて主上の御ありよ韻字を二ところ
て儒者の文章のうつくしきを中少将のかりて主上の御ありよ韻字を二ところ
まなんを一字用あるべきなり　細　の古家に諸法は各一字を探らせ作者十人わけ八人云詩二百
と一字つゝ韻よりわけ十四人の内八七言二句と用あり悉韻のさはりつゝ
さいしやうちうしやう云ふかり　河　真淳臻韻也　細　韻字を探はて各其ゆゑ
名仏の字をあるとなのつせ今日の花園の家は云花字さうえのみ自然の幸也ごはぢ
容儀心ゆたかにまうとうえうち
やうとくもて[illegible]
人いかゝわらはと中将の
こゝろいとゝ[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

式部殿の羽衣をかしかれば有るべしとり給へ　細天暦の例なり　孟芸営帽一越調大曲新樂
楽とうくうこうくうとりまうこうく　孟芸営帽　細楽の実の字をよみ〳〵うり　孟芸海波と華あひすぎ　孟芸
源氏の中納言の実　細楽の実の字をよみ〳〵うり　孟芸海波と華あひすぎ　孟芸
の中納言なり
芸文ぐぐ　細芸文
呼　源中納言の華ともうで
一さうく　細芸文　朱雀院
源氏の華と右〳〵　細
華　右の華ともみもとり
芸営帽の表と華　細
とうく　笙
右の中　細　蓼上
〳〵ぬとうしろいあり
どさやうのいとまうり
もれぬく
源中納言〳〵　細　楽
楽の内の原のうしくのあて
なれば何とくとそそとそ
あるく
〳〵えん　細　柳　花苑上
古八華あり　今八断絶也
河或院云此樂彰圖八婆羅
門僧正持来勝女也其姿如

吉祥天女舞　静　舞也
笙　勅源とあり　細　花苑　花苑　花苑　花苑
源氏の例あれども堂上の華〳〵　勅源とあり
源氏の例　仰　河伯　延喜延長の花宴　堂上の華〳〵
みるとうもうみも
花苑　右の地　細　講師の内　壺中に
左右文殿とうそうく
海前よ左て文人とも
下に進く　講頭もく
〳〵しもえ〳〵みやく〳〵
講師と指とうみて蓼
分人〳〵　孟　講師も感
隠てうしもやうしたの
と道遥院の今あのう
入給華太府の講せ机
芸文の女院のあみうち
給てうのうぐひすき
人とぶくこ給とかり
花のれんく　細　花苑
大うこう　細　花苑の華ちら
とんの雅　長今　東宮
花よりきそあて風
ぐ〳〵和四そてく〳〵
さくもちうとちうぐ
かみくわうぐきと花のど

いつまでもあるとも　其日の詩　講
てはぐくよ久らしめ　細　内侍
ぐらみと源氏の花めぐ　博士也
〳〵みやく〳〵ぐ　細　秀遠の
ものんよといとうう　細　相撲の帝
源氏の花を　細　中
いでうとろ　仰　源
同とあり
ろよ場げされん中実内めと
芸文の女院　細　長
ろうとぐ　細　長
大うよ花のとぐ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

てをまくのうち手をあげたるうの間よりそこに人のあやまちありて五色のすはれと人の手
よりひきとらくるを見て
勝月新よ　河新古てうもをびてうりもそびてぬきの東乃勝月よりてりのをちき　たる里
師　ふりのをちきと手人ちらくしば手紙よりふりのすはり女の月とめてくりてうこ
こなさきをよりてうりのう　孟こるさきをよりとこなさきをよりてうこ　晴　八数の月よ
あしば　こく　師　原のをまの方へ為ちこなさきをよりてうこ　拙の字八をれ
ちりのいとこーの字よりれ
ちりきの新の　細　ちりよりひもけざりはずりけりてはけきりこ　孟まよりの女のてう
色せどの手と吟じちりはずりの表と為せ正白はを色
下の白入方のれ月色さ
やうりを袋のはりけ
ちりぬとりつりや　師　
新のさまれちりはずり
よ保さ袋でとりしべ
すちはみをはゆりされれ
細　原の自称よりあしば人
よゆりされると計畏よ
の法べば人よすまりて
のしあし晩　原氏の自称よ
わしばをそれぬりを女
よちりせんしあり多の
詞　師　限慈皆女のまま
しめりちりし勝月新

原
ちりぬ袋とそ思とてやちりつりされり
細　ちりりよりざりはちり
ちりぬ袋とそ思とてやちりつりされり
細　ちりりよりざりはちり
さ海ちりや　
してとはなしてけあさまりたあきれ
ちりさ海いとりけりうりりありりを
あき海し　原初
ちをしく　うちりの人のとりの人どりまりはいを
孟人よゆりさられいめりせちりもりそで
うりとりあちんで思ひてそりの法てふ
細　新八原ちりもりとりを支さめしく　隙のち　いりてりりの
よ氏者りりちりと

のちりしちりはりはりりりりりのりりりりけ
るりよりはりりりりり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

そちの君ぞ乃　細　宮の兵部卿の宮の御子なり　孟　源氏の北の方の御父なり　暁　宮の御母の兄なり　方ハ右大臣のむすめ四君のあねなり　乃ハ河内の国の山なり　河不散　万葉　山ゐる人ももきめぬ橋荒いくるしきかなれそれとそ　細　帚木巻よりの大臣の

なれぬいとの恋なりんと　孟　腐月和尚六君

かのこと　細　中将のもとめぬ四の君なりこそ　暁　今夜の女も源の心よりかれも中ぐとい

よしとこそ　中こそれ　世をれぬ　ハの心　ゆ　こい　恋　よ　て

まくんと　大臣　志　ふ

をあくべいるる　ど　う　ぬむ　程　も

五六のまくれ　細　女　海

まぐくて　て　と　ぬ　乳　を

かりつる　文　ふ　ど　よ　す　ば　き　海

を　ど　ら　ぬ　ん　な　ど　ま　ば　ば　ふ

を　の　ま　な　ば　や　う　な　よ　け　て　も

まば　ま　ら　れ　ま　程　の　こ　な　う　わ　く　ま　う

もの　ハ　細　の　け　わ　ま　ま　ま

る　つ　や　と　あ　ら　ば　こ　う　ま　ひ　ら　べ　ら　れ　あ　ま

方ハ弁女方ろくしき

るのなりこと　細　あり　ぞ　う　ぬ

ろくんのなりくく　花　を　ハ　中　夫

乃　ハ　車　と　ろ　く　あ　つ　の　ハ

る　ハ　年　あ　り　ま　ろ　く　ハ　養　上

の　色　す　孟　暁　大　臣　の　ま　ち

養　上　な　し　の　ま　海　の　く　ふ　ハ

る　く　源　氏　の　御　ま　ま　き　ま

と　ま　ろ　く　ま　別　ま　ま　る

ろ　く　く　り

きの日ハ饗　細　日　饗　朝の儀

饗　花　宴　饗　宴　ま　右　月

ハ　男　踏　午　の　饗　三　三　月　信

の　儀　あ　る　ま　と　ま　ま　ま　ま

と　花　宴　ま　ま　り　な　り　ま　と　ま

ご　ろ　ん　の　る　花　の　き　れ　饗　き

ま　ま　り　ま　し　作　く

あ　の　ま　り　の　細　物　え　よ　右　大

臣　の　女　達　の　系　統　が　物　語

べ　し　と　そ　て　う　ど　世　饗　日

孟　腐月和尚の系統が物語

勝　月　和　も　退　お　ま　ま　ま

く　ま　と　そ　ま　ま　ま　ま　ま　ま

孫　あ　る　の　つ　と　ま　ま　ま　ま

四位少将　ま　中　年　な　ど　孟　夫

を　日　ハ　饗　宴　あ　の　こ　と　あ　り　て　ま　ぐ　れ　く　く

ま　な　く　ま　ま　ま　ま　ま　ま

月の息さちこ 細勝月夜
の見方也
いかにてこれとそうた
細文六の君いかれとそうさ
ざめぐさきこへ
ちくせくなり 細文せく
のせの絵てこしくしく話
へさもいくとこ 西右大臣
のせまして源氏をじこよ
こうたんなぐくありてけこ
絵表ちよ 細紫上のこ也
上の何よつくくなるめよ
しまとあこうり絵巻
ようをこ四間ものつし
扇のえこぐね 細檜扇
也物ようこうり 明他本
三重こうこ也書表紙
三重の字なり 七扇
八扇の三重こうね 元今
業扇の扇横面白裏横
扇也まの扇の巻よ 松巻を
みこの扇をひろけこう
やこうりこうこ 何清少納
云ぬ松巻ようまりこき

ちろて。ろ海三どろ仮はとこうこ世ろよ
をむねこうつぶれ活いくめていづれと去
うんちゃ世くなどこうて。ことぐこうりて
ろこねんもいよどやまぶこんのあろこ海よ
くこんさぬぬぬどいどづこうろべこさ
ろこうて去こうでぁこんどこいとこうれ
ろべきれいづこよせこうと世ぬこうひて。
はくぐこうとなどえんふこうこ姫君いよつまぐ
ろこん日ぬよかれいぬてやわんこうこて
世ぬ海ろこの扇こうこの海ぬどこうこのこうこね
めて。こうこ 細紫の雲とこうこ方ようこてめろ月とうこて。あろよ
こうこうこぬこへめこれうこゆこなりて
のこうこうひこうこんこうこ

うこうやこうめこうこうこ乃扇ぬここ海ようりあこ海ぬ
こうこうこうこ海ぬこうこうこて色こくこの京ろこ
こうこうこうこ 細源氏の中之
世こうこうこ
秀逸こ文文字清文級こ
絵海ろこ海こくここ伴
海海こ絵右水俊西年
月海の月の切絵をこめ
てこ世この陸こうこべ
こ月こ海こをこうこうこ
こうこ源氏こ八海こ
世こうこ源氏こ海こ
こ世俊成こ海こ源氏みこ
こうこ京こここ公の夕
こうこり。こ絵のこんの巻
海こここここここここ
こ海こ世こ分別こ
ここなり

世こここの世こ
細菊の地こ君世仏のまこんを
ここここここここ海こ海
こここここここここ男方こ海

こうこ海こ海こ海こ

まち人なれどそでのこうばいなれどそでのこうばいなれどそでのこうばいな

[illegible]

[illegible]

[illegible]

延喜二年三月廿日廿日左大臣花宴舎藤花下ニ有ル献物事歌　花ゆゑ
へて左大臣の亭ふくるまの花乃宴あり、又天暦三年四月十二日飛香舎春花宴よ和歌
管絃あり　細　西宮記ニ明

みてしかな古今よ見る人もなき山ざくらの
しへさくらゝ花古今よ花のうへ
奇の羽ゝ
と見し
の雲
うの
を一
ぶて
ぶて
ぶて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

細みづくきは、二面は扇のうとはなつかしけれど、それいとかなくいはゆる源氏物語の中にはいとかなくいはゆる
人うちとけどころ、ものとりあつかふ、はかなきの面うぶ、第とこれて。それをかいつる草で、花鳥風月の中は、
てんいせで　細　此人物もしく、源氏物語の、花鳥をとりあつめて、うちなげかるる
きよのうれうれ、源氏物語の、つれづれとやうしてうちなげかるる
あはざうり　細　今日は、うの紙を
れば、孫わり、一日の戸口をと
ち花うの紙の日ぶれ、樟ち
入るものとはいつ、わのうち月
はなるの物のかそ、のつ、右
とかく、ーとうの
なるよゆへ　細　仮ゆへまぐ、
と、仰名もちぶ、ちなな
き人数まぐ、ふ、ものの
ふうう　細　ふくふよつ、うるうるうるぐ、ぐ、ぐ、